

岩子が十四歳の春、会津若松の叔父おじの家にあずけられました。叔父の山内春しゅん瓏ろうは、代々会津藩の医者をつとめ、いろいろな学問にもすぐれていました。

岩子は、叔父の家の手伝いをしながら、裁縫さいほうはもちろん、読書、習字、そろばん、礼儀作法など、叔父の子供とともに教えを受けました。

当時は、江戸時代のおわりのころで、世の中は乱れ、ききんが続きました。

そのために、貧しくて子供を育てられない人々が多く、子供が生まれるとすぐに捨てたり、生まれる前に子供を殺すような悪い習慣が、平気で行われていたのです。医者いしやの叔父は、このことを非常に心配し、本に書いたり、町民や農民に説いてまわったりして、この悪い習慣を止めさせようと、努力していました。

少女岩子は、叔父の仕事を手伝いながら、

「なぜ、人々は、捨子すてごをするのだらう。」

「いくら貧しくとも、子供に食べさせることぐらい、できないだらうか。」